

周囲の正常組織との比較で、病変部への tracer の集積を、集積なしから顕著な集積までの 4 段階で評価し、clearance delay の有無を観察した。clearance delay を認めたのは悪性病変 5 例、良性病変 1 例の計 6 例であったが、症例数が少なく、その組織診断に明らかな傾向は認められなかった。

病変が四肢にある場合は、周囲筋組織の運動による生理的集積で修飾されることや、撮像方向の再現性などに問題が残った。

14. 骨シンチグラムにおける頭蓋骨びまん性陽性集積の成因についての検討

吉岡 清郎 福田 寛
(東北大・加齢研・機能画像)
山田 健嗣 (仙台厚生病院・放)

骨シンチグラムにおいて時に認められる頭蓋骨びまん性陽性集積につき、出現の性差・年齢差を調べることによりその成因を検討した。551 例の骨シンチグラムを対象とし、頭蓋骨びまん性陽性集積の出現頻度を男女別に 10 代ごと 80 歳代まで集計した。

頭蓋骨びまん性陽性集積は、男性では 60 歳代 2.5%、70 歳代 3.2%、80 歳代 10.0% に出現し、60 歳未満にはまったく認められなかった。女性では 40 歳代から出現し 25.0%、50 歳代 70.7%、60 歳代 60.9%、70 歳代 53.7%、80 歳代 25.0% に認められた。陽性集積は男性に比し女性で明らかに多く出現し、女性での出現率は 50 歳代で急激に上昇する。この結果は閉経後ホルモン状態の変化による骨ミネラル変動を表すと考えるのが自然と思われる。

15. 分化型甲状腺癌の ^{131}I 治療成績 ——長期生存例の検討——

丸岡 伸 山崎 哲郎 後藤 靖雄
坂本 澄彦 (東北大・放)
中村 護 (国立仙台病院・二放)

^{131}I 治療導入時からの観察期間が 10 年以上経過した分化型甲状腺癌 35 例 (平均年齢 52.7 歳) のうち、10 年以上の長期生存を認めたものは 13 例 (平均年齢 34.5 歳) で、治療回数は 1-17 回 (平均 6 回)、 ^{131}I の投与量は

3.7-71.65 GBq (平均 25.48 GBq) であった。年齢別では 40 歳未満の 10 例中 9 例、40 歳以上の 25 例中 4 例であった。組織型別では乳頭癌の 16 例中 7 例、濾胞癌の 19 例中 6 例であった。転移部位では肺 10 例中 7 例、肺骨 3 例中 0 例、骨 12 例中 2 例、リンパ節 9 例中 4 例であった。40 歳未満、微細結節型肺転移で長期生存例が多く認められ、40 歳未満の乳頭癌肺転移例は 4 例全例が 10 年以上の長期生存をしていた。骨転移例でも ^{131}I 治療を定期的に行うことにより長期生存の得られる例も認められた。

16. 甲状腺腫瘍に対するエタノール注入療法

中駄 邦博 加藤千恵次 鐘ヶ江香久子
伊藤 和夫 古館 正從 (北大・核)

甲状腺全摘後の再発乳頭癌で ^{131}I 治療が無効であった 8 症例と、切除困難と判定された原発乳頭癌 1 症例に対しエタノール注入療法 (PEIT) を施行した。現在まで治療効果の判定が可能な 8 症例 13 病巣に関しては 76.9% (10/13) が PR 以上になった。また、PEIT の 2 週間後に喉頭全摘術が施行された 1 例では推定体積 14 cm^3 に対しエタノール注入量は 6 ml であったが、摘出標本では腫瘍の約 50% 弱が壊死に陥っていた。PEIT の副作用として酩酊感、注入時の痛み、漏出したエタノールによる神経障害 etc. がみられたが、対症療法で軽減が可能であり、現段階では palliative therapy の域をでないが PEIT は有効な方法であると思われた。なお、嚢胞を有する症例にも PEIT を試みたところ 3~4 か月後には完全消失が認められ、今後良性腫瘍にも応用が可能と考えられる。

17. ^{201}Tl - $^{99\text{m}}\text{Tc}$ サブトラクションシンチグラフィによる異所性副甲状腺の局在診断

鐘ヶ江香久子 伊藤 和夫 加藤千恵次
永尾 一彦 中駄 邦博 藤森 研司
古館 正從 (北大・核)

副甲状腺機能亢進症は大きく一次性と二次性に分類されるが、手術操作による侵襲や持続性機能亢進、ならびに再発を防ぐ点で術前にその局在を確認することは重要である。異所性の腫大に対しては ^{201}Tl - $^{99\text{m}}\text{Tc}$ サブトラ